

ひたすらに主に仕えるために

コリント教会の一部の人々の間に、男女の関係や結婚の問題に関して誤った禁欲主義的傾向があったことはすでにこの欄で書いた。禁欲主義は、一般に、この世を「聖」と「俗」に分け、この世に属するもの（人間の持つ自然の性本能や情熱も含めて）は汚れたもので、神の前に真に聖くあろうとする者は、これらのものを捨て生きなければならないと考える。そこから男女の性の交わりを卑しいものと見なし、神に仕えるためには、それを避けなければならないとする独身主義の考えが生まれてくる。

コリントの教会に起こったのもそのような行き過ぎた敬虔主義の問題であった。それに対して使徒パウロは、第7章前半（1～24節）で、このような禁欲主義の誤りを指摘し、信者同士の結婚のみならず、たとえ配偶者が異教徒であったとしても、その結婚関係は神の恵みの下にあるのであって、決してそれをいやしいとしたり、いとうべきものと考えてはならないと言い、結婚の神聖性とその祝福を教えてきた。

しかし同時に、パウロは、結婚が本来、神に仕えるためのものでありながら、神に仕えることを妨げるいろいろな問題を引き起こすものであることもよく知っていた。つまり、結婚があたかもすべてであるかのようにそれを絶対化して、肝心の神をないがしろにする人間の罪と弱さのもたらす問題である。そこでパウロは7章後半で、コリントの人々に、結婚をあたかもそれが全てであるかのように絶対化しないようにと警告する。

彼は言う、時は縮まっている（29節）、危機は迫っている（26節）、この世の有様はすべて過ぎ去る（31節）、つまり、終末の時が来る、主の再臨と最終的なさばきの日が来る、キリスト者は、依然としてこの世において日々の生活をいとなみ、仕事に励み、結婚関係を続け、夫婦生活を喜び、家庭を築いていく、がしかし、この世におけるそのような営みが、あたかもすべてであるかのように、それを絶対化し、それに埋没し、すべてのものの源であり目標である神を忘れ、終末の日の到来を忘れるようなことがあってはならないと、29～31節で「逆説的な表現」をもって語る。

パウロは、キリスト者が置かれているこのような終末的状况の下で、思い煩うことなく、より自由に、主に仕えて生きることができるという独身のもつ効用を語るが（32～34節）、しかし決してそれを絶対化しない。そうではなく、既婚者であれ未婚者（独身）であれ、キリスト者の生の最終目的は「ひたすら主に仕える」ことにあり、そのために品位ある生活（新改訳では「秩序ある生活」、口語訳では「正しい生活」）を送って、主の御前に生きることがいかに大切であるかを教えるのである（35節）。

キリスト者は「時が縮まっている」という終末的状况の下で、どうしたら神の御前に正しく、喜ばれるように生きることができるか、どうしたら余念なく主に奉仕することができるかという視点から、自分の結婚生活も、職業や交際も、楽しみやレジャーも、時間や財の使い方も、すなわち生活の全てのいとなみを信仰をもって再検討し再整理していくことの大切さである。

使徒ペテロもそのような生き方を次のように教えている。「神の日の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがたは、極力、信心深い行いをしていなければならない。・・・愛する者たちよ。それだから、この日を待っているあなたがたは、しみもきずもなく安らかな心で、神のみ前に出られるように励みなさい」と（第2ペテロ3：11～14／口語訳）。